

表紙の人

身近な自然を、 守りたい

～野鳥の姿に重ねた写真家の思い

今号の表紙の人は、市内在住の中学生動物写真家の^{あいしや}藍沙さん。小学3年生の頃から動物の写真を撮り始め、野鳥の撮影は小学5年生の頃から。当時は動物園のバードショーなどを撮影し、この時に得た知識や経験が、今の野鳥撮影に生きていると言います。

藍沙さんはこの夏、富士フィルムフォトサロンが若手写真家を応援するプロジェクト【写真家たちの新しい物語】で、「東京の野鳥たち」と題した写真展を開催。公園や川など都内の野鳥を捉えた写真約30点を展示し、見る人に身近な自然の大切さを伝えました。

「今回の展示会は、身近な自然というのを



▲国内外のさまざまな野鳥を撮りたいという藍沙さん。夢はヒコドリやケツァール、ヘビクイワシなどの撮影。



▲「良い写真」は、最短5分で撮れることもあれば、どれだけ時間を掛けても1枚も撮れないこともあるそう。

モチーフにしている。私も身近な自然を守りたいという気持ちでやっているの。ピンクの紅葉（表紙写真左の作品）がありましたが、一昨年は台風の被害が少なかったけれども、去年は日野市も大きな打撃を受けました。その影響で、紅葉の色もだいぶ渋くなってしまって。身近なきれいなものは本当に近くにあるけれど、とても壊れやすい。私はその、きれいな自然をそのままにしておきたい」と語る藍沙さん。「ちょうどいいバランスでできているじゃないですか、日野市って。人間と、動物と、きれいな自然と、清流と。バランスを保っているけど、そのバランスも簡単に崩れることがある。（ファインダー越しに）『（あの鳥は）今日はここにいるけど、年々数が減っているな』とか『ここでも外来種が増えているな』とか。写真家は、とても身近にそういうことを感じられる立場にあります」

将来的には、日本各地にすむ鳥や、海外の鳥も撮影に行きたいとのこと。朗らかな笑顔で、撮影にまつわるさまざまなお話をいただいた藍沙さん。ますますのご活躍を期待しています。

撮影協力

FUJIFILM SQUARE(フジフィルム スクエア)内 富士フィルムフォトサロン 東京

今回、藍沙さんの写真展を開催し、表紙撮影にご協力いただいたのは、港区赤坂の富士フィルムフォトサロン。「写真文化」の発展を掲げ、厳選された作品が展示される。

1957年に銀座で開館。2007年に現在の場所に移転し、60年以上の歴史を持つ。入館無料。



▲富士フィルムフォトサロン 東京

日野市の人口

令和2年8月1日現在
※()内は前月比
ID 1004620

人口	187,032人	(-7)
男	93,732人	(-6)
女	93,300人	(-1)
世帯	90,705世帯	(+75)

人口増減の内訳 (7月)

出生	137人	転入	695人
死亡	118人	転出	709人
自然増減	19人	その他	-12人
		社会増減	-26人